

1

のたび国の重要文化財に指定された旧尾藤家住宅を詳細に眺めると、意外なところで今年の干支である「辰（龍）」の姿を見ることができまます。

ちりめん街道に面した主座敷には床の間と別に仏間が切られており、法事のときのみ開かれる押し込み襖かすまの向こうに仏壇が収納されています。この仏壇の隙間から中のぞき込むと、仏間の天井全面に和紙が貼られ、所狭しと龍が描かれています。薄墨で描かれた雨雲の隙間からのぞく龍の顔や鋭い三本爪、蛇のような腹、そして先端がひれ状になった尾が描かれています。仏壇の上端と仏間天井の間隔は狭く、鑑賞というよりは縁起担ぎのために配された雲龍図と考えられます。

西洋の「ドラゴン」が火と密接な関係にあるのに対し、東洋の「龍」は雨や水を司ります。大事な家屋、中でも先祖代々の位牌を収める仏壇を火災から守る狙いがあったの

ではないでしょうか。

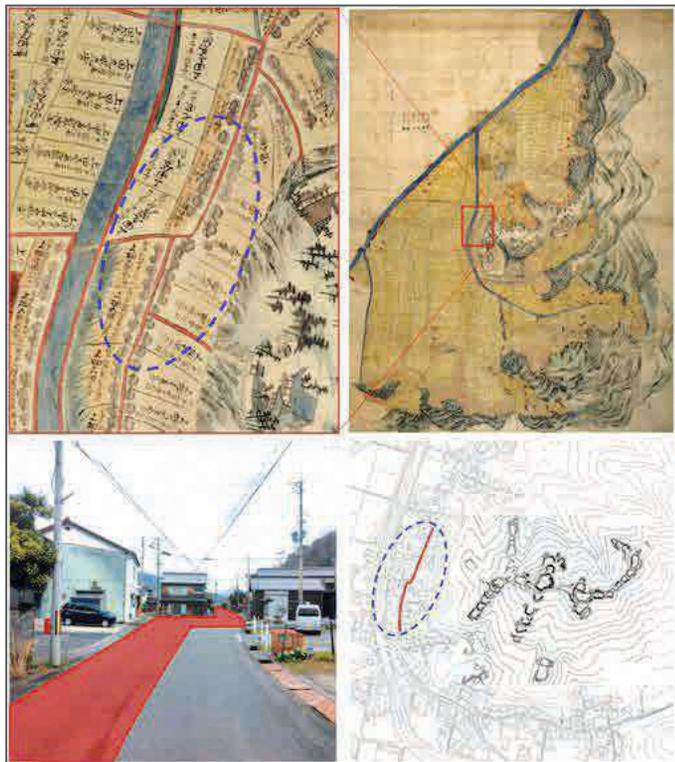
信仰目的の仏画にはよくあることですが、作者名を記した落款などはなく、そのため制作された年代もわかりません。天井板の継ぎ目ごとに亀裂が生じている雲龍図ではありますが、丹後震災や戦火をくぐり抜け、重要文化財となった今日まで旧尾藤家住宅を守り続けています。

（与謝野町教育委員会）



「雲龍図」作者・制作年代不詳
紙本墨画 天井画

※ 今月のALT リレーコラムはお休みします



今の道路に見る戦国時代の名残

石

川区には多くの古絵図が伝わっています。その中に江戸時代後期の天保12（1841）年に作成された大きな絵図があります。この絵図には家並み・社寺・有用樹木などがとても詳細に描かれており、具体的な情報を読み取ることができます。

「道」をよく観察すると、不自然にクランク状に屈曲した部分があることに気づきます。このクランクの謎解きは、江戸時

代前の戦国時代にあると考えられます。背後の山中には石川城という戦国時代の大きな山城跡があり、このクランクは城下の防衛のために、故意に道を屈曲させたものである可能性が高いのです。今の道路を観察すると、ちょうど西禅寺の下の道路が不整形に幅が広がっています。これはこのクランクの名残なのです。意外なところに戦国時代の城下の足跡があるものです。

（与謝野町教育委員会）

男

山区に伝わる古絵図に、明治6

(1873)年に作成されたものがあります。この古絵図には、道・水路・種目・地番・地名などが示されています。その中でも「道」に注目すると、板列八幡神社の前から東に向かう道が途中で「┌」の字形に屈曲していることがわかります。今の道路は真つすぐ東に通っていますが、当時、この道はなく屈曲していま

した。今も残る細道の屈曲はその名残なごりなのです。

この屈曲道の謎解きは、戦国時代にあると想定されます。山上にある板列八幡神社は男山城跡という戦国時代の山城跡で、この屈曲道は防衛のために故意に屈曲させたものである可能性が想定されます。男山城・城下の屈曲道・男山川(堀として利用可能)の3つはどこを防衛しようとしたのでしょうか？



戦国時代に府

中を拠点(府中小学校地は御殿か?)とした丹後守護・一色氏の守護所防衛の西面防衛施設の可能性を想像し、たくなります。戦国時代の防衛遺構が、物言わずに私たちの傍らにあるようです。

(与謝野町教育委員会)



① 古絵図（明治19年作成）



算

所区域を描いた古絵図に、明治19

（1886）年に作成されたものがあります。この絵図の道に注目すると、「ㄣ」の字形に屈曲して描かれている部分があります（写真①の楕円囲い部分）。今の道では、聖三一幼稚園の下の道の部分です。この道が蛇行している理由は、自動車普及する以前のクランク道の名残りだからです。

この屈曲道の謎解きは、戦国時代にあると想定されます。聖三一幼稚園の裏山

には安良城跡やすらがあり、その南方には金屋城跡があります。この辺り一帯は、加悦谷の在地の一番の実力者であった石川氏が支配していた土地です。一説には、石川氏を倒した有吉氏の支配領域という考え方もあります。

いずれにしましても、聖三一幼稚園下のクランク道は、加悦谷南部を拠点とした石川氏ないし有吉氏の北面防衛施設の可能性を想像することができます。

（与謝野町教育委員会）

時の贈り物 [第 135 回 古絵図に見る戦国城下の足跡 4 「後野と金屋の村絵図」]



今の道路に見る戦国時代の名残



後 野区と金屋区の境界の道は、実は「L」

の字形に屈曲した道だったのです。今は町道と府道が並行して通っているのですが、気が付きにくいのですが、後野区の古地図〔明治21(1888)年〕と金屋区の古絵図(明治20年ごろ)を接合すると、屈曲した道しかないことがわかりま

す。

この屈曲道は、戦国時代の金屋城跡に関係があると思われるかもしれません。後野区から金屋区までの一帯は、戦国時代の加悦谷の一番の実力者であった石川氏の中核域でした。この屈曲道は、石川氏が戦闘に備えた防衛施設であった可能性が考えられます。

(与謝野町教育委員会)

加

悦区域を描いた古絵図に明治6・7年ごろに作成されたとされる大きな絵図があります。

この絵図の「道」に注視すると、「┌」の字形に屈曲している道が4カ所あることがわかります。この道は、今「ちりめん街道」と呼んでいる道になります。また、加悦奥川が大きく湾曲していることもわかります。なお、この絵図には与謝野町役場加悦庁舎から旧加悦町役場庁舎への道路が描かれていませんが、この道は大正15年の加悦

鉄道の開通に合わせて新設されたものだからです。

このクランク道と曲がった川の謎解きは戦国時代にあると想定されます。戦国時代の加悦・後野・金屋一帯は、加悦谷の在地の一番の実力者であった石川氏が支配していた土地でした。ちりめん街道のこのクランク道と曲がり川（＝堀として利用）は、加悦谷南部を拠点とした石川氏の中核エリアの北面防衛施設として整備されたものである可能性が想定されます。

（与謝野町教育委員会）



今の道路に見る戦国時代の名残